



サルトル/ボーヴォワール/他

# 文学は何ができるか

平井啓之訳

河出書房

KAWADE WORLD BOOKS 2

文学は何ができるか



© 1966

QUE PEUT LA LITTÉRATURE? by S. de Beauvoir,  
Y. Berger, J=P. Faye, J. Ricardou, J=P. Sartre,  
J. Semprun.

© 1965 by Union Générale d'éditions.

Japanese translation rights arranged through  
the Bureau des copyrights français, Tokyo.

定価 350 円

1966年 9月15日 初版印刷

1966年 9月20日 初版発行

訳者 平井啓之

発行 株式会社河出書房新社／河出朋久

住所 東京都千代田区神田小川町 3 の 6

TEL. 292-3711

振替 東京10802

印刷 三松堂印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

## まえがき

一九五六年からふたたび出はじめた再刊『クラルテ』は、一九二五年ごろにアンリ・バルビュス<sup>1</sup>の周囲に集まったグループ『クラルテ』からその名を借りて来ています。その『共産主義学生連盟』の機関誌としての生命や歴史は、たしかに短いものですが、過去十年間の特筆されるべき二つの根本的な現実に触れることなしには了解され得ません。

——第二十回ソヴィエト共産党大会以来、国際労働運動によって練り上げられた新戦術と、それに伴う特殊な諸条件、とくに先進資本主義諸国に関係する諸条件。

——アルジェリア戦争に反対し、また大学の改革を目指してのフランス学生運動の闘争。

しかし、この序文で、とりわけわれわれが関心をもつのは、UECF（フランス共産主義学生連盟）においてその発展の諸段階のあいだに、共産主義系の新聞の役割について生まれたさまざまな考え方であり、実際、革命的新聞とは、いかに作られるべきでしょうか。新聞という称号にふさわしくあるためには、いかなる批判の規準に応えねばならないのでしょうか。

レーニン<sup>1</sup>は、彼の時代において、その規準を規定しました。革命的新聞は、宣伝者であり、教育者であり、

組織者である、と。しかし、一九六五年において、西欧の労働運動と前衛的知識人の闘争に固有の文脈の中で、レーニンのこの定義は何を意味するでしょうか。

これらの問題についての論争は、数多くありました。一九五九年以降に優勢であった意見は、いくつかの分析、とくに以下の問題に関連のある分析の上に根拠を置いています。

——数年来、人間の自由な駆使にゆだねられるにいたった情報の新しい手段に関するもの。

——今日の新聞、および、たとえばテレビジョンに対抗して必然的に利用せねばならないさまざまな方法に関するもの。

UECF下の闘士諸君は、そこで自ら心に問うたのであります。利用すべき客観的現象であるこれらの技術的变化を、大学へのマルクス主義の浸透を強化するために、いかにしてとりいれるかと。

けれども闘士諸君の行動のこの段階は、彼らが没頭した他の一連の分析、すなわち、勉強環境の分析、その構造、そこで顔を合わせているさまざまな思想<sup>イデオロギイ</sup>、そこに生まれる諸要求、などと不可分のものであったのです。

このような政治的な考慮のすえに、その経験にそくして、UECFの指導部は『クラルテ』の形式および内容の刷新をこころみました。まず、コミュニストの機関紙を、問題になるあれこれの事件に関するマルクス主義的テーゼのたんなるカタログと化してしまいうことに他ならぬような考え方から絶縁したのです。その結果、コミュニストの学生諸君にとって、大学内部での『クラルテ』の介在は、一九五八—五九年以後、次の三つの主要な方向によって特徴づけられるに至ったのです。

(一) 学生諸君に對話を提案すること。

『クラルテ』は数回にわたって、革命的批判に関して自らの見解と異なつたいくつかの見解を対決させました。とりわけカトリック学生および自ら社会主義を呼称する学生たちと見解をたたかわせたのです。これらの対決は、二つの項のいずれか一方を、かの誤つた二者択一によつてえらぶことに在るものではありません。すなわち「相手」を徹底的にやつつたり、或いは、政治的、思想的なすべての進歩的動向を、過敏症を起したマルクス主義へと「同化」したり「統合」したりすること、ではないのです。そうではなくて、マルクス主義的探究を、非教条的な精神の中で発展させることが問題なのです。

(二) 勉強環境についての諸問題に関するアンケートやルポルタージュを紙上に導入すること。

このことは新しいことではありません。久しい以前からコミュニスト系の新聞はそれに多くのページを割いて来ました。しかし『クラルテ』で一九六〇年にはじまったこれらの連載物を支配するやり方は、とりわけ倫理的であろうと望んだのです。それは、新しい型の社会の必然性すなわち社会主義についての自覚は、また同様に、日常生活から生まれたさまざまな疑問や、支配階級によつて伝えられた理想的人間像や神話の否認などを経験するものだという暗黙の確信をもつて、恋愛とか、さまざまな人間関係の問題に専念したのです。

(三) 社会の革命的变化に際しての文化事象の重要性の認識と再認識。

『クラルテ』は、この重要な活動領域において、たとえその諸提案がまだ明らかに不十分だとしても、この種の問題に強い関心を寄せているコミュニスト学生諸君やコミュニスト知識人たちの批判的反省のために寄

与するところがあつたと自負できます。われわれは新聞の文化欄の発想のもとになっている主要な点を、いくつか列挙するにとどめましょう。

——革命的批判と民族文化の概念との関係を分析すること。

——芸術の自律性と創造の自由。

——「革命的文化」の概念の検討。

このような概念の検討は、明らかにそれに見切りをつけることを意味するのではなく、逆に、現代の音楽、文学、絵画のもつ複雑性とともに変化するものとして、その概念をゆたかにすることなのです。

『クラルテ』は、現代において、文化事象に関して一つの方針をもつということは何を意味するか、党と共產主義的大衆の組織との役割はいかにあるべきか、を理解しようとするところで見えました。この役割は、たんに芸術の——また同様に科学の——開花のための政治的社会的諸条件をつくり出すことにのみ存するのか、それとも、芸術家が身につけ得るはずの新しい価値の誕生をともなつて、文化の眞の方向を提示することにより、はるかのかなたまで行くことに存するのでしょうか。

UECFにおいて行なわれてきたしました現に行なわれつつあるこれらの問題についての恒常的討論や、またUECFの闘士たちのファイトのおかげで、『クラルテ』は今や学生新聞中の最大のものとなることを得たのですが、ただし、周知のように、それを取りまく諸条件は、必ずしも樂觀を許さぬものなのです。補助金もなく、ひとり立ちをしているこの新聞の独自の体験は、学生の世界をこえて、数多くの知識人たちによって寄稿を見るまでの支持を得ることになったのです。

ここ二、三年のあいだに、『クラルテ』は、こうして、大学の統一のための素因とも見られるようになりました。そしてクラルテの人氣はUECFの闘争がこの領域においてもたらしてくれたものにも負うのであります（反ファシスト大学戦線のことを想起していただきましょう）。クラルテはこの領域のことをUECFの発意に負うことが多いのですから。たとえばCERM（マルクス主義学習研究センター）と共催で行なわれた『マルクス主義的思考』の第一週、一九六三年二月のエフトゥシェンコ<sup>＊</sup>の夕、あるいはまたこの本の内容をなしている討論会は、『クラルテ』の路線の中に直接に記銘されているのです。何千人もの学生諸君や知識人たちがそのことを理解しています。彼らはでたらめに面白い見物だからやって来たのではなく、『クラルテ』が生きつづけて、創作家たち、科学者たち、革命者たちのあいだに、同様な討論を活性化することを得るようにと、やって来たのであります。

この先鞭をつける、統一への動きは不可逆的なものであり、西欧においてブルジョワジーを打倒することを肯うコミュニストたちは、自分たちの革命の後につづく、独自の歴史的路線を見出すことでしよう。『クラルテ』はふたたび自らのものとなった役割において、一九六〇年代の大学で、社会主義に向かつてのフランスの道程のさなかでの学生と知識人との革命的闘争の要素の一つとなるでありましょうし、またそうでありつづけることでしょう。

一九六五年一月

『クラルテ』



# 目次

まえがき

一

緒言

イヴ・ビュアン

二

討論

ホルヘ・センプルン

三元

ジャン・リカルドゥ

五

ジャン＝ピエール・ファイユ

七

シモーヌ・ド・ボーヴオワール

九

イヴ・ベルジエ

一三

ジャン＝ポール・サルトル

一四

訳注

一七

解題

平井啓之 一八



文学は何ができるか

*Que peut la littérature ?*

# 緒 言

イヴ・ビュアン  
(『クラルテ』編集長)

\* Yves Buin 一九三九年生まれ。現在は『クラルテ』編集長の地位を退いて、医者（精神分析）として活躍。著書に『レ・ザルフ』、『真夜中ごろ』の二作（いずれも小説）がある。

## 二つの問題

今夜の集いについて、次の二つの基本的な問題を提起することができます。

——まず、なぜこの討論会を行なうのか。

——つぎに、コミュニストは、なぜこの討論会を望むのか。

書くことの意味  
とは？

実際、機械化され、技術が幅をきかせ、非政治化されたものとして念入りに描き出されているこの一九六四年のフランスにおいて、書くという行為に、いかなる意味を付与すべきでしょうか。そしてまた、文学的創造の所産が、社会的所産としての資格で、社会法則の活動圈内にはいるものである場合、それはいったいどうなるのでしょうか。

もつとはつきりした別の言葉でいえば、文学はいまなお、現実の力を所有しているでしょうか。そしてその力は、どのような形を身にとっているのでしょうか。それは否定としての力でしょうか。異議申立ての力、不能性の転形あるいは証明としての力、でしょう

か。

このような重大な諸問題に、ここに列席されている作家諸君は答えようとされるのです。けれども、たんに文学の社会的機能と目的とだけを考えるのであれば、われわれの討議は限られた狭いものになることでしょう。われわれは、文学作品が通過する一連の媒体をすべて見逃すことになりましょうし、何よりもまず、おそらく最も肝心な媒体である、還元不能な意味をもつ作家自身、および、ただちに起る次の問題、つまりその作家の文学が彼自身および人間について、いったい何をわれわれに明かすことができるか、という問題を見逃すことになりましょう。

# この討論会の趣旨

それでわれわれの討論は、アカデミックなものにはならないでしょうし、文章と言語についての技術的な諸問題は、当然それとして興味のあるものとは言え、議論がそこにしぼられるということにもならぬでしょう。

この討論会は、前に掲げた問題に対しての、作品の中であるいは作品によってする明らさまの、あるいは暗黙裡の回答が、それぞれに異なっている人びとのあいだの、対決のこ